

第3回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日 時 平成20年2月1日（金） 午後2時～午後4時

場 所 京都ロイヤルホテル 2階 祥雲の間

出席委員（敬称略）

西島安則会長、千宗室副会長、池坊由紀委員、梶田真章委員、柏瀬武委員、川勝平太委員、金田章裕委員、坂井輝久委員、潮江宏三委員、鈴木千鶴子委員、芳賀徹委員、船戸潤子委員、村井康彦委員、山本容子委員、吉積巳貴委員、渡部隆夫委員、星川茂一委員

事務局

山岸吉和文化市民局長、平竹耕三文化芸術都市推進室長、寺井正文化芸術都市推進室担当部長ほか

1 開会

進行（平竹文化芸術都市推進室長）

2 委員紹介

3 議事

（1）京都文化芸術都市創生計画の取組状況について

＜西島会長＞

計画に掲げた施策の着手状況について、皆さんの御意見をもらう場としたい。この審議会を楽しみにしていた。皆さんの意見や、思いを交換し合う場にできればいいと考えている。本日集まった委員の皆様の顔ぶれを拝見するだけでも文化芸術都市の象徴という思いがする。文化芸術が後退しないように支えたい。

これまでの審議会でも創生とは何かという議論があった。創とは刀で切られるという意味を持つ、非常に激しい字である。京都は既に文化芸術都市であるが、そこに創生という言葉を付けることで、もう一度京都が生まれ変わるという意味を持たせた。

これから世界を考えると、我々の使命は文化芸術都市を創っていくことである。芸術は自由で、いきいきとした環境の中でしか生まれてこない。このようなことを認識しながら、本日は計画の取組状況について説明を聞き、改めて議論していきたい。

＜事務局＞

京都文化芸術都市創生計画の取組状況全体概要について説明

＜事務局＞

「京都創生座」の取組状況について説明

「文化芸術による地域のまちづくり」の取組状況について説明

＜西島会長＞

千宗室氏に館長になっていただき、芸術センターを設立した当初は大きな期待と好奇心で注目をいただいてきた。最近は明倫周辺も全体に落ち着いた雰囲気の芸術のまちになってきている。

立誠地域は、昔はいい雰囲気だったのに、今はどんどん文化から離れた雰囲気になってきている。今回の事業で、立誠小学校の近辺の店の人にも、地域が落ち着いた雰囲気になってきたと喜んでもらっている。今後も府と市が相談して京情緒のあるまちにしてほしい。

＜事務局＞

「ようこそアーティスト 文化芸術とくべつ授業」の取組状況について説明

「京都芸術センター、京都市芸術文化特別奨励制度」の取組状況について説明

＜今年度選定の奨励者、横山佳代子氏の紹介と横山氏による演奏披露＞

＜事務局＞

「京都文化祭典」の取組状況について説明

「文化財の保護・活用」の取組状況について説明

（2）意見交換

＜西島会長＞

新しい試みや、今までの伝統的な文化を生かしていくための試みなど、随分たくさんのお話があった。今後のあり方について御意見があれば伺いたい。

＜委員＞

大学生やボランティアに、美術展やコンサートなどの事業に関わってもらうことで、さらに意識を高めてもらうというような、様々な面白い試みが根付きつつあるということがわかった。

提案だが、芸術系大学のデザイン科の学生に、効果的な情報発信を考えてもらつてはどうか。

例えば「とくべつ授業」や演劇、コンサートなどの事業を記録にとって、学生に編集してもらい各小学校などに配信してはどうか。一つの事業に直接触れられる人は限られているし、多くの「とくべつ授業」を実施することも難しい。しかし、記録にとったものを多くの人に配信できれば、限られた予算でも多くの人に事業を周知・宣伝することができるし、若い力を使うことで次世代の育成をしていくことに

もつながる。簡単な方法でいいのでは是非検討していただきたい。

＜西島会長＞

実施したことを配信し、みんなで共有することは非常に大切である。具体的にできるといい。新聞やテレビでも写真等を使って、文化事業を伝えてもらっている。市役所の広報も、もっと積極的な広報があつていいのではないか。東京にある「京都館」では、定期的に様々な資料冊子が配られているが、京都にいる人は配布できていない。

＜委員＞

「ようこそアーティスト 文化芸術とくべつ授業」は、大学生に協力を頼んでデジタルに記録すればよい。それを小学校に配るなら予算もあまりかからない。手始めにできることからやっていけばよい。

＜西島会長＞

キャンパスプラザで行われている催しでも大学生が定員を上回る申込みをしてくれている。それぞれの大学で効果的な発信・周知方法について一緒に考える機会があつてもよい。

＜委員＞

この計画に掲げる事業の全体予算はいくらなのか。先に説明のあつた各事業の予算額はいくらか。また、文化事業のどこにウエイトを置いているのか。それぞれバラバラに進めているのか。この計画全体を誰が総括しているのか。文化に係る予算は増えてきているのか。

＜事務局＞

平成19年度予算ベースで文化事業予算額は33億円程度である。前年度より若干増えている。これは計画策定を機に、計画に掲げた新規事業を実現するための予算措置がされた影響もある。計画では、これまで行われていた事業も含めて77の施策を体系化しているが、その中でも「京都創生座」など「五つの京都先行プロジェクト」を重点的・先行的に進めることとしている。この五つはそれぞれに連関して文化芸術都市の創生を支える位置づけをしており、計画の11ページに連関図を示している。予算は、「創生座」が2000万円、「地域のまちづくり」が1000万円、「ようこそアーティストとくべつ授業」が450万円、「文化祭典」が6800万円、文化財事業費全体が82,000万円、「芸術文化特別奨励制度」は540万円である。

また、文化芸術都市推進室が、条例及び計画の推進の進退を担っており、計画の進行管理をしているのは計画推進担当課長である。

＜委員＞

源氏物語千年紀については、昨年夏から街中でも多くの事業があつて新聞紙面をにぎわすようになった。そんなに予算をかけずに、千年紀の影響が様々なところ

ろに波及した。宇治市では源氏物語バージョンのお茶が自動販売機で販売されてたり、宅配便のパッケージやパンの包装が源氏仕様であったりする。他にも、大阪でラブコメディの演劇や歌劇団が源氏物語や紫式部をテーマに取り上げている。市民レベルでの催しでも朗読劇や連続講演会を行うなど源氏物語を取り上げているものが多い。こんなに幅広く広がるものかと驚いた。

市・府・商工会議所の連携のもとで実施されている、この源氏千年紀の取組はよい成功例である。そんなに経費がかかっていないし、事業のやり方、方式を他の取組でも参考にしてほしい。これがうまくいき、11月1日が古典の日となれば大成功である。

＜委員＞

市内小学校で百人一首を暗記する取組をしてはどうか。市内全域が無理ならさせていくつかの区で特区という形でやってほしい。それも文化芸術都市創生といえる取組である。取り組んだ小学校には3000万円ぐらい奨励金を出してはどうか。

＜事務局＞

中学校では冬休みに百人一首を覚えるという取組をしているが、現状について、教育委員会から聞いて、私どもも勉強していきたい。

＜委員＞

カリキュラムの問題として小学校で文語を取り扱うのは難しいと思うが、国語の枠を超えてカルタとして楽しむのであれば、幼稚園でも小学校でも取組ができるのではないか。私自身、高校生の時に一番興味を持って源氏物語を読んでいた。桐壺の巻だけでもよいのでは若い時期に読んでもほしい。

計画の取組が総花的になるのは仕方ない。京都市域では小学校の枠を超えて、伝統文化などの体験学習をしてもらう「みやこ子ども土曜塾」という事業を実施している。講師となる一流の人材がたくさんいることは京都の持つ大きな力である。「ようこそアーティスト文化芸術とくべつ授業」などを含め、今後もこういった事業を増やしてほしい。

また、その際の芸術分野について、学校側では、「現代芸術はわかりにくい」という不安や先入観を持たれがちだが、それを取り除くような役割を文化市民局にしていただきたい。現代芸術の分野の講師や取組を紹介してほしい。京都国際マンガミュージアムも全国的に注目されている。新しいものにもスポットを当て、新しい芸術をわかりやすくする手助けをしていただきたい。

＜千副会長＞

文化芸術のまちづくり推進事業について、一点御注意いただきたいのは最近エリートや特区を作るという概念が主流になつてはいないかということ。まちの安全は大切であり、住人に迷惑をかけてはいけないという大前提を守ったうえで、

もっと若者に対して課すルールの面積を広くしてほしい。立誠で若者中心のまちづくりをするならば、まちを「きれいにしていく」ということが「邪魔者を排除する」こと、「臭いものに蓋をする」ことではないとしっかりと認識してやってほしい。「まちをきれいにする」という発想をストレートにＨＰに書いたならば誤解が生じ、反発が出るだろう。誤解による反発ができる限り防ぐことが行政の責任である。芸術の再発信をしたいという人々に対し、警察を置いて規制する方法をとれば、「死んだ文化」を木屋町につくることになるだろう。コンセプトをきちんと整理してほしい。

また、百人一首を暗記させてはどうかとの御意見があったが、暗記から生まれる楽しみもあると思うが、果たしてその先の楽しみまで子供たちを導くことができるかが課題である。そこまで到達ができるような取組をすることが大事である。

＜委員＞

取組や予算の状況を聞いて、計画の重要性を思い知った。府市協調のもと、23年には国民文化祭京都大会が行われる。国が1億、府が4億ぐらいの予算で計画されている。これに関しても、オール京都、府市協調という体制でお願いしたい。

嵐山に時雨殿ができ、そこでは、機械とカルタ遊びが融合し、遊びながら学べる。最先端の科学技術と文化芸術には密接な関連がある。京都のまちも北部が保存、南部が開発といわれる。最先端の技術開発をうまく文化芸術に取り入れ、文化芸術のまちとして京都が栄えるように考えていくべき。

＜委員＞

科学技術と文化芸術が密接な関係にあるという御意見に賛成である。文化と最先端の科学技術は融合しなければいけない。先日、迎賓館に行く機会があった。しつらえや建物の外観は完全に和風であるのに、最新の素材、最先端の技術、優れた職人技術が融合している。科学・数学も宇宙の森羅万象を美しい数式で表すというもの。科学と芸術が矛盾しないことを心得るべき。文化芸術はどうでもいい、科学技術を発展させなければという風潮があるが、文化芸術や、美的なものをベースにした文化都市づくり、まちづくりをしていくという姿勢が必要である。

「芸術文化」と言ったり「文化芸術」と言ったりしているが私は文化は芸術に立脚しているから「芸術文化」であると思う。

説明の中で8億円が文化財予算とあった。考古資料館の入館料は子どもについては無料とするべきだ。

先ほど美しい女性がバイオリンを浴衣で弾いている写真があった。洋風と和風は対立しない。宝塚の人が着物にブーツを合わせるという格好をしているのも新しい感覚だと思う。京都の風土を考え、京都も5月～10月は完全に衣替えするというのはどうか。衣替えなど多様性の中の統一を図ることや文化施設における

子どもの入場料無料化を進めてもらいたい。そして科学を取り込んだ芸術に立脚して文化芸術都市を創生する取組を進めれば、京都が活気付くのではないか。

＜事務局＞

昭和56年から考古資料館は無料としている。二条城、美術館、動物園も土・日は子ども無料である。また、先ほどの文化事業予算の33億円については、コンサートホールや京都会館、美術館、動物園等の施設維持費を含めた金額であり、全てがソフトに費やす経費ではない。説明不足をお詫びする。

国民文化祭については、構想が固まっており、今後も京都府と協議を進め、府市協調で成功させたい。「芸術文化」と「文化芸術」については、平成13年に文化芸術振興基本法を定める以前、本市では「芸術文化特別奨励制度」をはじめ、「芸術振興」を中心に文化行政を進め、「芸術文化」という文言を使用していた。しかし、平成13年の文化芸術振興基本法制定以降、国において「芸術文化」に加え、「暮らしの文化」や「祭礼文化」を取り入れられ、従来より広い範囲で文化を捉えることとなつたため、本市においても、「文化芸術」という文言を使用し、幅広く文化を捉えることとした。

「文化芸術」と「科学技術」の関係については、MOT（マネジメント オブ テクノロジー）のような分野にもデザイン感覚、芸術の感性が必要とされており、市の科学技術を専門とする部署から、是非美術館等と連携したいという声も聞いているので、今後両者の接点を見つけて、進めて参りたい。

＜西島会長＞

自然科学における真理探究を行うには自然と一体にならなければならない。自然を征服し、戦うという姿勢では探求できない。芸術においても、どこまで自然と一体となれるかが重要なである。

委員の皆さんのお話を聴いても、「芸術」と「文化」と「科学技術」が一体となるものであるということだった。私が京都市立芸術大学の学長に就任して、一番最初に学生たちに話したこと、「科学技術が最先端を追求した結果、爆弾等の開発につながる危険性を防ぐためには、生活における美を尊重しなければならない」ということであった。今その気持ちを一層強くする。

現在、最先端の科学技術の世界では、ナノテクノロジーの先、ピコテクノロジーという分野に研究が進み、どんどん小さなものを探求するようになっている。そうすると今度は命の尊厳という問題が生じてきた。よっぽどしっかりとした気持ちで文化を考えないと、最先端の科学技術の開発だけでは世界が暗黒の時代に入ってしまう。これから世界に希望を持たすために、大切なことは文化である。最近のダボス会議では政治と経済の話ばかりが議論されている。20年前のダボス会議では芸術も含めて、政治や経済科学などいろいろな分野の議論がなされた。経済は本来、何が人を幸せにするのかということを考える学問である。

文化芸術都市という言葉の中になぜ「創生」が必要かということを考えたい。
<委員>

計画に掲げられた取組項目である「国際交流に取り組む市民団体等との連携の推進」について私も活動をしている。

私は国際交流会館で日本語を教え、日本文化を伝えるということに携わっている。外国の方にとっての京都は伝統文化というイメージが大きい。これからもお茶や華道、書道など伝統文化を伝えていきたい。

京都市には約500名の文化ボランティア登録者がいる。その半数は文化芸術事業の受付サポートなどのボランティアで、残り半分は文化の技をもっている方である。そのようなボランティアの人が活躍できる場をもっと作っていただければと思う。

<西島会長>

国を超えた意味での文化芸術交流というのは深い意味を持つ議題である。以前、エジンバラから芸術大学の学長がきて、京都で借景ということについての講演をされた。京都という土地で行う講演だから「借景」というテーマを選んだということだった。日本、京都、あるいは和の文化においては、「公」と「私」という考え方方が世界中で最も成熟している。国際的な文化の交流により、互いが刺激しあいながら高めていけたらよい。今後も楽しい審議会にしたい。

<委員>

貴重な御意見をたくさん賜り御礼申し上げる。最初の説明が長くなり、忙しい中お運びいただいたにも関わらず全委員の御意見をいただけず申し訳なく思う。いただいた御意見は今後施策の充実に生かしていきたい。予算がないと事業は進んでいかないが、京都が今後生きていくうえで非常に重要な部分が景観と文化を大切にすることと考えている。財政状況が厳しい中、文化関連予算は落ち込んでいたが、今後はなんとか予算も確保し、全体として京都がどうすれば京都であり続けていけるかを考えていきたい。